



Title	性的虐待における秘密主義と無力感の役割 : Freud, Ferenczi, Winnicott の理論のレビューから
Author(s)	陶, 映雪; 野坂, 祐子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2022, 48, p. 199-214
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86868
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

性的虐待における秘密主義と無力感の役割
—Freud, Ferenczi, Winnicott の理論のレビューから—

陶 映 雪・野 坂 祐 子

目 次

1. はじめに
2. 性的トラウマをめぐる精神分析理論
3. その他の議論における秘密主義の役割と無力感の影響
4. まとめと展望

性的虐待における秘密主義と無力感の役割 —Freud, Ferenczi, Winnicott の理論のレビューから—

陶 映 雪・野 坂 祐 子

1. 問題意識

近年、子どもへの性的虐待への社会的関心が高まってきたが、このテーマは社会からは耐え難い話題とされ、性的虐待に関する研究は1世紀近くも眠っていた。Herman (1992: 中井訳, 1997) は性的虐待への関心の復活には社会的・政治的傾向があったことを指摘している。それに助力したのは60年代から70年代にかけての第二波のフェミニズム運動であり、この運動を機に、女性は高等教育を受ける機会が増え、インセスト (incest) や性的虐待について公に話すことができるようになった。だが、日本で子どもの性的虐待が話題に取りざたされるようになったのは最近である。平成27年度犯罪白書では「性犯罪者の実態と再犯防止」が副題として取り上げられ、強姦被害者において未成年の割合が高いことが確認された。また、令和3年度警察白書で公表された子どもに対する強制性交が176件、強制わいせつは708件であった。

性的虐待は多くの場合、深い秘密に包まれ、虐待の発見は大人よりもはるかに困難である。今から100年以上前、Freud (1896) は、子どもは見知らぬ人から虐待を受けるよりも、両親、親戚、教師などから虐待を受ける可能性が3倍高いことを指摘している。日本では、平成27年度犯罪白書からすると、強姦（現在は、強制性交）、強制わいせつ共に、性暴力被害者と被疑者の関係が「面識あり」及び「親族」の割合は20年前（平成7年）に比べて上昇しており、強姦における「親族」の割合は8.6倍、強制わいせつにおける「親族」の割合は13.5倍に増加していた。しかし、これらの統計値も被害実態の一部を表すものにすぎず、加害者が家族や知人といった身近な人である場合には、被害者が被害届を提出しないことも多いため、子どもと加害者との関係の詳細の実態は把握されにくい状況にある。

性暴力被害はトラウマとなりやすく、外傷後ストレス障害 (PTSD) や抑うつといった精神健康の悪影響を及ぼす可能性があると言われてきた (Kessler et al., 1995)。トラウマは孤立感や疎外感をもたらすとされているが (DSM-5, American Psychiatric Association, 2013)、性的虐待に特化した、その背後にある心理的力動への検討は不十分である。これらの影響に加えて、性的虐待における開示は難しいとされ、特に信頼できる家族成員が虐待に関与している場合、子どもは情報を開示する動機が低く、開示する機会も少ない

(Lyon, 2009)。身近な大人と子どもの力の差が子どもを非常に無力な状態にし、その無力感が支援を求めることを妨げるだけでなく、子どもをさらなる虐待にしやすい状況に置いてしまう。また、性的虐待を受けた子どもは必ずしもその時点で嫌悪や拒否といった反応を示すわけではないため (Summit, 1983)、周囲からの発覚も難しいと推測される。ゆえに、子どもを対象とする性的虐待の影響は、大人を対象とした性暴力の影響と区別して検討する必要がある、特に、子どもやその家族を支援につながりにくくする秘密主義と無力感は、性的虐待を理解する上で重要である。

さらに、性的虐待のような幼少期からの慢性で反復的なトラウマの影響は、PTSD の評価だけでは不十分であることが指摘されており、子どものアタッチメント、生理、感情調整、解離、行動、認知、自己概念などの多数の領域で、複雑な問題を引き起こす可能性が高いと言われている (Herman, 1992; Cook, et al, 2005)。現在の PTSD の診断で用いられている DSM-5 も、子どもが性的虐待を受けて生じる主観的なトラウマ体験を全て考慮できているとは言えない。

精神分析の領域では、Freud の誘惑理論の放棄以降、トラウマを正面から扱わなくなった印象を世間にもたらしたが、実際はその後も数ある精神分析家たちはトラウマに言及し、子どもの性虐待によるトラウマ体験 (Sandor Ferenczi, 1873-1933) や、虐待や不適切な養育による人格形成への影響 (Donald Woods Winnicott, 1896-1971) などについて議論し続けた。今社会が注目している性的虐待の影響は、主観的なトラウマ体験に注目した精神分析の理論で説明されている部分もあり、これらの理論を性的虐待に関連づけて改めて再考することには意義があると考えられる。そこで本稿では、性的虐待に関連する Freud、Ferenczi、Winnicott の議論を整理することにより、性的虐待が子どもの精神にどのような影響を与えるのか、それらの影響と性的虐待がもたらす秘密と無力感に包まれた特殊な状態とどう関連するのかを検討することを目的とする。

2. 性的トラウマをめぐる精神分析理論

2-1. Freud のトラウマ論

Freud が最初に唱えた精神病理学の理論は、トラウマの中でも特に性的なトラウマに焦点を当てたものであった。1893年から1895年にかけて、Freud と Breuer は、ヒステリー患者の女性たちが過去に起こった激しい感情的な出来事の結果に苦しんでいることを発見した。その後 Freud はいくつかの臨床例を作成し、そこでは父親による誘惑の体験は普遍的なものであり、そのような現実場面の記憶が女性の神経症の病因であると信じていた。しかし、そのわずか数年後 (1897年) には、彼はこの理論を棄却し、別の方向へ論を進めた。彼が誘惑説を棄却したのは、患者の報告の真実性を疑わしく感じ、患者が語る話は、全てではないが、実は幻想だったという理解に移ったからであった (1887-1902, letter 69)。Freud がこのようにして「幻想性」の意義を認めたことは、後の精神

分析理論の核心となる夢、無意識、幼児性欲などの概念への道を開いたきっかけとされ、彼の後継者たちから肯定的に評価された (Jones, 1961)。のちに、Masson (1984) や Herman (1992) は、Freud が女性や子どもの患者からの性的虐待に関する報告を信じていない印象を与えるとして、この転換を批判した。誘惑理論の放棄に至ったのは、Freud 自身と当時の社会が持つ反フェミニズムな政治的空氣に由来するものという指摘もあるが (Herman, 1992)、本人が挙げた理由には「あまりにも多くの性的倒錯が起きているとは考えにくい」とあり、トラウマの話を書くことで Freud 自身が受けた衝撃も見過ごされるべきでない。Freud の場合、セラピスト側に生じる強い不安や怒り、悲しみ、あるいは罪悪感に対処するために、大量なトラウマの出来事への意図的な否認につながった可能性もある。

しかし、Freud は誘惑理論を放棄した後も虐待の事実を完全に信じなくなったわけではなく、むしろ、インセストを事実として捉え続けていた。Freud は、エディプスコンプレックスと幼児の性欲を説明する重要な論文 *The wolf Man* (1918) においても、外部に由来する誘惑を重要な外傷要因として評価していた。*Inhibitions, Symptoms and Anxiety* (1926) では、トラウマは防護壁が破られたものとして理解され、トラウマによる不安を自動的なものと捉え、環境の役割や無力感に言及していたからである。Freud はトラウマを広義的に捉えようとしていたと言ってもいいが、性的虐待の存在を否定したわけではなかったのだろう。

同時期に Freud は、実際のトラウマ的な出来事は彼が当初考えていたよりも中心的なものではないと考え始めた。この時期に提起された「遡行作用」(deferred action) は、彼のトラウマ理論で最も重要な概念の一つである。Freud は、幼児期の経験や記憶が「後になって、新鮮な経験や新しい発達段階に合わせて修正される」可能性があることを説明するためにこの用語を使った (Laplanche & Pontalis, 1973)。彼は遡行作用を通して、心的現実とは外部現実と同様にトラウマになりうることを発見し、「外傷性があるのは、経験そのものではなく、経験が性的に成熟した後に記憶としてよみがえることである」(Freud, 1896, p. 164) と述べた。実際、性的虐待はその発生時点で子どもにとって性的な意味を持たないことが一般的であり、子どもが経験を理解できない、記憶が明確でないなどの理由で、起きたことを秘密にしてしまうことは少なくない。しかしそれらの経験は明らかな症状を残し、「実際の体験だけではヒステリー症状は起こらないが (中略) それに関連して呼び覚まされた以前の体験が、症状を引き起こす一因となる」(p.197) と論じられているように、何かのリマインダーによって以前統合されなかった体験が呼び起こされ、再体験されることがある。つまり、Freud が「幻想性」に焦点を向けたことは、被害記憶はただの空想であって患者の語りは信憑性がない、と言っているようでいて、実は内的な体験 (心的現実) が実際に経験された出来事 (外部現実) と同じくらいの影響力をもつことを強調しているのであり、その認識はトラウマを理解する上で重要といえる。だが、Freud は幻想論へ転じることで、外部環境の役割や家族の力動の影響を最

小化し、性的虐待による影響への理解は「心的現実と幻想が極めて重要」という結論に止まった。

2-2. Ferenczi のトラウマ論

Freud の弟子と同僚であったハンガリーの精神分析家 Ferenczi は、Freud の幻想論から離れ、具体的な性的トラウマに焦点を当てた。Ferenczi (1933) は、子どもが使う「優しさの言葉」と大人が使う「情熱の言葉」が混同され、子どもの愛されることへのニーズと、親によって強要された両義的な性的関係との間に生じた根本的な葛藤を虐待の起因として認識した。彼の理論は、性的虐待を社会的事実として考えることに注意を喚起するものであり、そこでは幻想ではなく、外的な現実の役割が強調された。

家族の力関係においては、母親が重要な役割を果たしているにも関わらず、Freud は母親の役割を十分に認識していなかった。一方、Ferenczi は「二相性トラウマ (biphasic trauma)」という概念を提唱し、虐待の第二段階で大人が嘘をついたり、否定したり、潜在的な養育者が拒絶する過程がトラウマ化のプロセスにとって重要であるとした (1928、1933)。これは、無意識や生物学的な要因 (幼児性欲やエディプスコンプレックス) に注目することが多い Freud の説とは対照的な、関係性に基づくトラウマ論の形成を示唆するものであった。彼は、子供が出来事そのものだけでなく、いかに拒絶され、秘密にされることで苦しむかについて述べている。母親や他の潜在する養育者から拒絶され、または秘密を守るように要求された結果、子どもは自分の実際の経験とはほとんど関係のない歪んだ現実のイメージを抱くようになる。保護が欠如していること、あるいは子どもが保護の放棄を脅されたように感じることで、性的虐待の秘密性は高められる。彼によると、父親の権威と子どもに対するパワーの乱用に、母親の軟弱と盲目さが重なることが、虐待を真にトラウマ的なものにしていく (Ferenczi, 1932)。母親が虐待を肯定的に受け止めてしまうことや、非保護的であることと同時に、子どもは父親の侵入に直面しなければならない状況が作られ、性的虐待は加害者、被害者、非保護的な養育者という (少なくとも) 3 人の人物が関わる三角関係の図式が存在する。この場合、母親は何もしくなくとも、共犯者のように感じられることもある。子どもの母親への攻撃は無力感からくるもので、苦痛を紛らわせる役割を果たしている可能性があるとは彼は解釈している。また、加害者への同一化も考えられ、母親が守ってくれなくても、子どもは何としても母親に近づこうとする願いがあり、そうするために、虐待的な父親になり母親を攻撃することも含まれる (Hunter, 1986)。Ferenczi は性的虐待で秘密が生じる原因はより複雑なものであるとして、内的な防衛機制のほか、外部からも子どもの無力感を増大させて状況を悪化させる要因を探そうとした。

2-3. スプリットティングと秘密主義の関係

Ferenczi は、子どもが混乱や怒りの感情を声に出せない状態を描くために、「舌の縛り」

(tongue-tied) (1933, p.159) というメタファーを用いた。それはまさに「秘密」のことを指していた。さらに、子どもは巨大な不安を追い払おうとして、ロボットのように麻痺してしまい、それと同時に、加害者も否認したり、嘘をついたりして、罪悪感を克服しようとする。結果として、子どもは無実と罪悪感を同時に覚えて混乱し、心がスプリッティングする。子どもは現実感に対する自信を失い、やがて、自分の気持ちや経験を口にすることができなくなる。出来事を真にトラウマ的にするのが、この舌の縛りである。

スプリッティングとは、対象および自己についての良い幻想と悪い幻想を別個のものとして隔離することを意味し、「耐えがたいもの」を切り離すという意味では解離の概念と類似している。Ferenczi は、トラウマの瞬間、心はスプリッティングし、すべての一貫性を失い、心の一部が体験を記録し、別の部分は何もなかったと信じようとする (Ferenczi, 1933) と述べ、スプリッティングによって、信頼できない原初の対象が内在化されることになり、成人後の倒錯や対象関係の乱れの基礎となると考えた。スプリッティングは、子どもが大人の罪悪感を内包することとも関連している。虐待者は自責から過度に道徳的になり、厳しい行動をとることで、子どもの罪悪感を強めてしまう (Ferenczi, 1933)。それについて Fairbairn (1943) は、すべての虐待者が罪の意識を感じているわけではないとし、子どもの罪悪感は、秘密にしておかなければならない虐待の悪質さと結びついていると指摘した。いずれにしても、子どもは罪悪感や「何かが間違っている」という違和感と内的に闘わなければならない、その結果、現実では無言の犠牲者になってしまうというというメカニズムが示唆される。

残念ながら、子どもが何もなかったふりをしたり、加害者を良い対象として捉えようとする努力は決して成功せず、さらに病的な自己を創らざるを得ない状況に陥る。「賢い赤ちゃん」(The Wise Baby) もまた、性的虐待の産物である。Ferenczi は「賢い赤ちゃん」の状態を「差し迫ったストレス下、自己の一部が分裂して、自己を観察し、助けようとする…他人をも世話する傾向がある。」(1931, p.136) と描き、「学問を身につけて、知恵や知識で『賢い大人』よりも抜きん出たいと願うのは、自らの状況を逆転させたい、克服したいという願いを示している」と指摘している (1926, p.349)。1933年に、「子どもは成熟した大人が持つような感情を瞬時に発達させることができる」(p.165)、「家庭内のすべての無秩序を正そうとする」(p.166) と述べている。スプリッティングによって子どもの人格は分裂され、半分枯れ果てて、半分は賢明でいようとする。このような防衛的な自己と迎合的な世話をする自己は、どちらも真の主体性を持っているとは言えず、秘密主義を打ち破るために機能しないことが想像される。

Ferenczi が観察した被害児が凍り付いてしまう現象や、自己の正常発達を犠牲にしても良い対象の幻想を守ろうとする傾向、加害者が周囲の否認がもたらす被害児の生きづらさは、現在も性的虐待におけるトラウマ体験を検討する際に重要とされるテーマである。しかし彼の思想には限界もある。例えば、彼は母親の役割を主にリスク要因として見なし、保護的な母親の役割を完全に見逃している。また、Ferenczi は性的虐待

を単回のショックと見なし、性的虐待の反復性は考慮しなかった。子どもは機能不全の家庭で育ち、虐待を異常に感じたり、トラウマティックなものと感じたりすることは全くないかもしれない。したがって、トラウマのショックで直ちに自己が分裂するという Ferenczi の理論は、十分でないところがある。

2-4. Winnicott のトラウマ論

Freud が性的トラウマを本質的で避けられない経験としているのに対して、Ferenczi はトラウマを純粹に否定的な経験として考えていた。Winnicott の場合、トラウマを避けられるものとして捉えながらも、「偽りの自己」(The False Self) という環境欠陥の産物を普遍的なものとして概念化した。彼は、特定の虐待を強調することではなく、(主に母親が提供する) 環境の欠陥という観点からトラウマを理解していた。

Winnicott のいう「真の自己」(1960a) とは、創造性と自発性を特徴とし、ニーズを満たすのに十分に支持されている自己のことである。これは、子どもが後に真正で統合された自己意識を発達させるための基礎となるものである。一方、偽りの自己とは、言いなりな自己の始まりである。Winnicott (1954) は、心身 (psyche-soma) の健全及び真の自己の発達には良い環境が不可欠であると仮定している。悪い環境は、常に適応を必要とし、存在の連続性を乱すからである。存在の連続性とは別に、「程良い母親」(good enough mother) の重要性も強調されている。「程良い母親」とは、乳児の万能感の幻想に応え、ある程度意味を持たせることができる環境を提供できる母親である。一方、「程良い状態ではない母親は、乳児のジェスチャーを満たすことができず、代わりに、自分のジェスチャーを代用し繰り返すことで乳児の従順に意味を与える」(p.145) と述べ、これが偽の自己の起源であると考えられている。偽りの自己には異なる程度が存在し、健全な社会化程度のものから、病的で真の自己と勘違いしてしまうような完全に分裂した自己まで様々である (Winnicott, 1960)。真の自己も偽の自己も徐々に発展していくものであり、その創造には繰り返しが必要である。Winnicott によれば、「新しい人生の段階ごとに、真の自己が深刻な中断を受けていないのであれば、現実の感覚が強化される」(p.149)。これによれば、性的虐待のような反復な中断が続くと、真の自己の連続性が途切れ、最悪の場合、偽の自己に完全に置き換えられてしまう可能性がある。性的虐待では、大人が自分の欲求を子どもの真の欲求に置き換えてしまうという特徴があるため、子どもの真の自己が自然に育つ機会が持てなくなる可能性が大きいだろう。

2-5. 「偽りの自己」と秘密主義の関係

性的虐待の場合、偽りの自己が秘密を育んでしまう可能性がある。まず、偽りの自己が病的に育つような環境は支持的でないことから、そうした環境では、親族や隣人は真実に耐えられないと感じ、子どものニーズが見えず、子どもとその家族が支援につながりにくいことが推測できる。そして、偽りの自己は常に周囲を観察し、過剰に適応しよ

うとしているため、子ども自身も、経験したことは家族にとって考えられない、耐えられないことと信じ、自分から口を噤む。対人関係においても従順になりがちで、多重な被害を受けやすくなる。侵害が繰り返されると、子どもはさらなる侵害を不安に思い、それに対抗しているときにだけ現実を感じるようにさえなる。自ら望んで黙っていても、偽りの自己の中核的な特徴は、自発性と創造性の欠如であり、それが子どもの自己の構造を支配している場合、被虐待児は感情的に届かない存在になっていくことが考えられる。自身の感情について話すどころか、感じとることさえできなくなり、秘密を明かすことがさらに難しくなることが示唆される。

秘密主義の問題はトラウマの要因として Winnicott に認識されていないが、「偽りの自己」の概念の構造には、性的虐待における有害な秘密主義を説明できる部分がある。偽りの自己も賢い赤ちゃんと同じく「観察する自己」であり、危険な状況では助けになるが、子供は真の自己の部分を犠牲にする対価を払わなければならない。真実な表現を妨げる点でも、両者は類似しており、子どもの「すべてを知っているのに、何も感じていない」(Ferenczi, 1931, p.135) といった状態を導いてしまう。Winnicott (1960) は加害者との同一化の現象にも触れ、偽りの自己を発達させた子どもは心の中に空虚感を感じ、自信を失っている結果、強力な他者との融合を求め、子ども自身の創造的な解決策を犠牲にして、借り物の力で自分自身を満たしていると解釈している。つまり、早熟な自己は、短期的な戦略として機能するが、長期的な病理につながる可能性もあり、真実の感情と表現を妨げることで秘密が育まれることが問題になる。皮肉なことに、このような早熟さは、加害者を勇気づけるだけでなく、周囲からは才能や独立性として称賛されることもある。

2-6. 累積的トラウマの概念

ところで、トラウマを単独な出来事として見なすべきか、それとも重なるトラウマの影響を見るのかも、Ferenczi と Winnicott の重要な視点の違いであった。Winnicott が環境の失敗を強調し、トラウマは突然の衝撃ではなく、累積的・継続的なものであると言う点では、Freud や Ferenczi の観点と異なる。Ferenczi (1933) の理論では、差し迫った危険によって生じるショックが前提であり、スプリッティングは攻撃の瞬間の原始的な防御として見なされ、本来の対象関係が突然崩壊することを指す。一方で、Winnicott は、子どもへの反復的な侵害による対象関係や人格形成の変化に注目した。Kris (1956) は、ショック・トラウマからストレイン・トラウマを区別している。ストレイン・トラウマとは、長期的な不満や緊張の蓄積によって引き起こされるものであり、両者は異なる種類のトラウマとして捉えられたが、どちらがより病的な結果を生むかという結論は出なかった。

Winnicott のトラウマは定期的な刺激によるという観点は、Khan の累積的トラウマの考え方に道を開いた。Khan (1963) は、母親の役割を保護の盾と見なし、累積的トラウマとは、このシールドが破られ、心身が定期的に打撃を受けることと定義している。発達過程におけるこれらの打撃は静かに蓄積され、同時に、母子間の病的な関係を修復す

るプロセスや試みが行われる。Khan (1963)によれば、子供は私たちが想像する以上にパワフルで忍耐する存在であり、こうした回復のための闘いは、病理をさらに複雑にする場合も少なくない。累積的トラウマの概念は、定期的な少量の虐待が後の病理につながるという点で、子どもの性的虐待を理解する上で重要であると思われる。しかし、WinnicottやKhanは、幼児に対する慢性的な攻撃や、母子間のアタッチメントの問題を論じるために累積的トラウマを用いており、性的虐待を説明するには限界がある。

3. その他の議論における秘密主義の役割と無力感の影響

子どもを対象とする性的虐待がもたらす主な心理的なダメージには、トラウマティックな性 (traumatic sexuality)、裏切り、スティグマ化、無力化の4つの側面が挙げられている (Finkelhor & Browne, 1985)。Ferencziの二段階のトラウマ説で言及されるような、加害者だけでなく非保護的な親からの拒絶は裏切りのテーマと関連しており、スティグマ化は性的虐待がもたらす違和感とそれによるスプリッティングを部分的に説明できる。Winnicottが言う偽りの自己は、まさに無力化の一種である。本稿で論じる秘密主義は、これらの心理的ダメージの現実的な結果として捉えることもできるが、秘密を維持することそのものがトラウマ体験の重要な一部でもある。

3-1. 秘密を維持する意味

家庭内で起きる性的虐待では、虐待の発見を阻むために、大人は愛情を断つと脅すなどして、あらゆる手段で口封じをする傾向がある。悲しいことに、虐待をしている親は、暴力を振るわなくても容易に成功する。Summit (1983)の性的虐待順応症候群理論によると、子どもにとっては、暴力を振られるよりも愛情や家族を失う方が恐ろしい。また、子どもが抵抗しないことに人々はいつも驚かされ、子どもが大人のように反抗したり、虐待から逃げたりすることを期待されていることに問題があると指摘されえている。実際、子供は寝たふりをしたり、布団をかぶったりして、「擬死状態」を演じることが多い。あるいは、加害者との特別な関係の一部として秘密にしておかなければならない、受け入れなければならないと感じることもある。

たとえ脅しがなくても、子どもは虐待について話し難い。虐待が子どもと親の絆を維持する唯一の方法である可能性もある。Hunter (1986)は、3歳の女の子のケースを描いている。少女は、姉がインセストだけでなく、両親による売春にも苦しんでいるのを目撃し、傷ついた記憶と両親の逮捕にもかかわらず、性的に活発な父親を表すモンスターと、自分を守ってくれる腕のないバレエダンサーの母の両方を内面化し、性的に受容している。ハンターによると、子どもは性的虐待の中で見捨てられたと感じれば感じるほど、より性的に魅惑的な存在になろうとするのではないかと考察している。この観察を通して、子供が搾取を受け続けるリスクを負っても黙っていたい、という欲求を理解するこ

とができる。それは、子どもが知っている見捨てられないための唯一の方法だからである。

3-2. 解離と秘密の関係

解離も秘密主義と深い関連がある。性的虐待を受けた子どもは必ずしも対象や自己を白黒に分けようとするスピリッティングが生じるわけではなく、全ての感覚がバラバラになり（良い対象も悪い対象も無く）、ただ混乱する状態にいる可能性がある。トラウマの概念及び精神医学のモデルが進化するにつれ、スピリッティングでは説明できない断片化や記憶と感覚の統合性の喪失は、解離現象として挙げられるようになった。DSM-5でもPTSDの診断に解離症状が前面に持ち出されるようになり、それは多くの被虐待児の状態に合致している。無意識に隔離された部分を分析しなくても、解離モデルでは、記憶と感覚がバラバラになることを理解しておくことが重要であると思われる。

性虐待の秘密を守ることは、大きな混乱を引き起こすことでもあり、何が正確なのか、なぜなのかわからないまま長時間を過ごすことになる。自身の経験を理解しようとする子どもは、否認やあからさまな嘘などを含む家族の力動によって、現実感が混乱することがある。Campbell (2014) は、被害者との治療中に遭遇したケースを挙げていた。彼の患者であるスミスは、両親から性交を強要された歴史をもち、父親は単に自分がしたことを否認し、母親はそれを秘密にしておくように言った。彼の中での現実の構築が崩れ、「既知のことが考えられないようになった」(Campbell, 2014, p.447)。Shengold (1989) は、家の中で起きる反復で慢性的な虐待を「魂の殺人」と呼び、それに伴う感情の剥奪がもたらす否定的な影響に注目した。彼によると、パワーの乱用を生き抜いた子どもたちは、適度なエゴの強さを持っている一方、自他に対するイメージや自らの感情を正確に特定できない課題を有する。解離は一種の防衛として、過剰な不安を払いのける保護的なものであると同時に、スピリッティングと同じように、現実感を犠牲にすしてしまう。そのため、解離が成功すると、子どもは虐待または自身の苦痛について無関心になる可能性があるため、さらなる秘密を生み出すという負のスパイラルが生じうる。

3-3. 累積的なトラウマによる無力感

Sinason (1988) は、愛情のある家庭での反復的な暴行のプロセスを調査し、母親に勢いよく口を拭かれた乳児を観察した結果を報告した。はじめは乳児に足や腕のモロ反射が見られ、2回目の観察では、乳児のジェスチャーは完全に硬直していた。3回目の観察では、タオルが口に触れたとき、乳児は母親をじっと見て微笑む。その笑顔は、多くの人が楽しんでいると勘違いするが、そうではない。Sinasonによると、乳幼児が毎日のように手荒な扱いを受けていると、サディスティックな攻撃を「飲み込む」ことを覚え、短期的な対処法として「微笑む」ことで、長期的な問題に至ってしまう。ここでいう「長期的な問題」とは、病的な偽りの自己と見なすことができ、笑顔は真の自己の健全な発達を犠牲にして、大人に合わせようとする迎合的な反応と見ることができる。時間の経

過とともに、子どもは「ノー」と言えなくなり、攻撃に対しても無力になってしまう。これは、近年注目を浴びているアタッチメントトラウマ (Allen, 2013) の概念と類似しており、アレンは、乳幼児期から既に安全なアタッチメントが築けず、根深い不信感をもたらすことをアタッチメントトラウマの結果としている。性的虐待のように幼少期からの慢性で反復性の対人的なトラウマの影響は、親子の関係が長い間抱えるアタッチメントの問題が荷担している可能性が高く、家族内の信頼関係の喪失やトラウマティックな関係性は、虐待よりもはるかに早くから存在しており、それが無力感につながると考えられる。

近年、子どものトラウマ体験における家族の役割が、回復を促進する保護要因であるとともにリスク要因になり得ることが指摘されている (野坂、2016)。親子や夫婦の境界が曖昧で、子どもが利用される状況にあることや、地域での孤立や貧困などの逆境的な環境がもたらす親のストレスは、重複なトラウマ体験のきっかけとなり、子どもをより脆弱にする。

また、世代間で連鎖する無力感が性的虐待のトラウマ化に荷担している場合がある。Fraser (1994) は、虐待を受けた過去を持つ親は、新しい家族の中で自分の経験を繰り返し、家族は性的虐待がつながりを求める手段となるような「文化」を獲得すると指摘している。家族全員がそれを奨励すると、無力感と秘密性は増幅される。親が子どもの被害について忘れなさいと言うのは、自身の悲しみや痛みを感じるができなかったためであり、子どものトラウマを理解するすべも当然ない。そうになると、虐待は家族の中で幽霊のように存在し、誰も本当の傷つきを伝えられないまま、大きな無力感を生み出してしまふ。

4. まとめと展望

以上、Freud、Ferenczi、Winnicott それぞれの観点から、性的虐待が子どもの精神状態に与える影響を考察した。特に、性的虐待において、口に出せないという体験の背後にある可能な心理的力動について検討した。これにより、遡行作用による記憶想起の困難や、非保護的な家族の関係性がもたらす無力さ、スプリッティングや病的な適応による早熟な自己、または解離などの感情の届かない状態が、誰にも言えない秘密性と無力感と関連していることが示唆された。

特に病的なスプリッティングや偽りの自己のメカニズムは、解離症状の重篤性を示唆した。子どもが虐待を秘密にしてしまうことが病理の自然な結果であると同時に、その体験もトラウマティックなものである。虐待を秘密にせざるを得ない状況の中で、子どもは内的に大きな混乱や解離を引き起こし、または偽りの自分を作り上げることで、さらに語るができない状況を作ってしまう。また、環境的な要因も重視されるべきであり、潜在的な保護者からの拒絶や機能不全家族、特に世代間で連鎖する無力感を見ることは、子どもの性的虐待を理解する上で特に重要であると指摘できる。

彼らの理論は子どもの主観的な体験に着目しており、秘密や無力を子どもが逆境を生き抜くために適応する結果、または対処する結果として描いていた。これは子どもが持つ強さを認識しているという意味で価値ある知見である。ただ、既述した各自の理論の限界に加えて、これらの議論は精神分析のモデルに基づいているため、無意識の分析に大いに頼っており、社会的な要因が包括されていない限界も有する。

本稿では、子どもが廻行作用、スプリッティングや偽りの自己を通して秘密を維持し、無力を感じており、さらに秘密を維持することや無力を感じることを媒介して、性的虐待が精神的健康に影響を与えることを仮説として立てた。この関係性を検証することは、子どもの秘密を維持する傾向により難しいと想定されるが、これらの要因以外にも、性的なスティグマや他で見過ごされている性的虐待に伴う逆境的な体験が、子どもの精神的健康をどのように影響しているのかを検討する新たな研究が必要になる。臨床場面で性的虐待による心理的影響を理解するにあたって、トラウマ事件の評価や PTSD 症状、行動のアセスメントだけでなく、性的トラウマの特殊性がもたらす人格形成への影響や、家族の力動などの現実状況が引き起こす内的な葛藤を含めた子どもの主観的体験に注目する必要性があるだろう。

引用文献

- Allen, J. (2013), *Mentalizing in the Development and Treatment of Attachment Trauma (1st ed.)* Routledge.
- American Psychiatric Association (2013), *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fifth Edition : DSM-5*, Washington, D.C : American Psychiatric Association.
- Campbell, D. (2014), Doubt in the Psychoanalysis of a Paedophile, *The International Journal of Psychoanalysis*, 95: 441–463.
- Cook, et al. (2005), Complex Trauma in Children and Adolescents, *Psychiatric Annals*, 35. 390–398.
- Fairbairn, W. R. D. (1943), The Repression and the Return of Bad Objects, *British Journal of Medical Psychology*, 19: 327.
- Ferenczi, S. (1928), The Adaption of the Family to the Child, *British Journal of Medical Psychology*, 8:1–13.
- Ferenczi, S. (1931), Child-Analysis in the Analysis of Adults, *The International Journal of Psychoanalysis*, 12:468–482.
- Ferenczi, S. (1932), *The Clinical Diary*, J. Dupont (Ed.), Cambridge, MA: Harvard University Press, 1988.
- Ferenczi, S.(1933), *Confusion of Tongues between Adults and the Child. In Final contribution s to the problem and methods of psychoanalysis*, Karnac, 1994.
- Finkelhor, D., & Browne, A. (1985), The Traumatic Impact of Child Sexual Abuse: A

- Conceptualization, *American Journal of Orthopsychiatry*, 55, 530-541.
- Fraser, L. (1994), Wednesday's Child: An Adult Survivor of Childhood Sexual Abuse, *British Journal of Psychotherapy*, 10:430-439.
- Freud, S. (1896), *Further Remarks on the Neuro-Psychoses of Defence*. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Volume III (1893-1899): Early Psycho-Analytic Publications, 157-185.
- Freud, S. (1905), *A Case of Hysteria, Three Essays on Sexuality and Other Works*, *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Volume XII (1901-1905): Fragment of an Analysis of a Case of Hysteria, 1-122.
- Freud, S. (1918), *From the History of an Infantile Neurosis*. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Volume XVII (1917-1919): An Infantile Neurosis and Other Works, 1-124.
- Freud, S. (1926), *Inhibitions, Symptoms and Anxiety*. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Volume XX (1925-1926): An Autobiographical Study, Inhibitions, Symptoms and Anxiety, The Question of Lay Analysis and Other Works, 75-176.
- Freud, S., Masson, J. M., & Fliess, W. (1985), *The complete letters of Sigmund Freud to Wilhelm Fliess, 1887-1904*, Belknap Press.
- Herman, J. L. (1992). *Trauma and Recovery*, New York : Basic Books (=1997, 中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房)
- 法務総合研究所 (2015), 『平成 27 年版犯罪白書—性犯罪者の実態と再犯防止』
- Hunter, M. (1986), The Monster and the Ballet Dancer: A Four-Year-Old's View of Sexual Abuse, *Journal of Child Psychotherapy*, 12:29-39.
- Jones, E. (1961), *The Life and Work of Sigmund Freud* (Abridged ed.), NY Basic Books.
- 警察庁ホームページ, (2021), 『令和 3 年警察白書』第 2 部第 2 章, https://www.npa.go.jp/hakusyo/r03/pdf/09_dai2sho.pdf. (2021 年 9 月 30 日確認)
- Kessler R.C., et al. (1995), Posttraumatic stress disorder in the National Comorbidity Survey, *Archives of General Psychiatry*, 52(12):1048-60.
- Khan, M.R. (1963), The Concept of Cumulative Trauma, *The Psychoanalytic Study of the Child*, 18:286-306.
- Kris, E. (1956), The Recovery of Childhood Memories in Psychoanalysis, *The Psychoanalytic Study of the Child*, 11:54-88.
- Laplanche, J. & Pontalis, J.B. (1973), *The Language of Psycho-Analysis*, (Translated by Donald Nicholson-Smith), W. W. Norton.
- Lyon, T.D. (2009), Abuse Disclosure: What Adults Can Tell, In B. L. Bottoms, C. J. Najdowski, & G. S. Goodman (Eds.), *Children as Victims, Witnesses, and Offenders: Psychological Science and the Law*, Guilford Press, 9-35.

- Masson, J.M. (1984), *The Assault on Truth: Freud's Suppression of the Seduction Theory*, New York: Farrar, Straus & Giroux; new edition (1992) New York: Harper Collins.
- 野坂 祐子 (2016), 「対人関係における暴力の「被害」と「加害」」, 『こころの科学』 188, 日本評論社, 73-78 頁
- Shengold, L. (1989), *Soul Murder: The Effects of Childhood Abuse and Deprivation*, Yale University Press.
- Simon, B. (1992), Incest—See Under Oedipus Complex: The History of an Error in Psychoanalysis, *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 40,955-988.
- Sinason, V. (1988), Smiling, Swallowing, Sickening and Stupefying: The Effect of Sexual Abuse on the Child, *Psychoanalytic Psychotherapy*, 3,97-111.
- Summit, R.C. (1983), The Child Sexual Abuse Accommodation Syndrome, *Child Abuse and Neglect*, 7, 177-193.
- Winnicott, D.W. (1954), Mind and its Relation to the Psyche-soma (1956). *British Journal of Medical Psychology*, 27:4,201-209.
- Winnicott, D.W. (1960), *Ego Distortion in terms of True and False Self. In: The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, Madison, CT: International Universities Press, 1987, 140-152.

Secrecy and Helplessness in Child Sexual Abuse: A review of psychoanalytic theories from Freud, Ferenczi, and Winnicott

Yingxue TAO, Sachiko NOSAKA

This article gives an overview of Freud, Ferenczi, and Winnicott's theories and some contemporary psychoanalytic views on child sexual abuse. By comparing their theories on psychological trauma, the authors demonstrate how the confusion of tongues, splitting, the false self, and cumulative trauma connect to secrecy and helplessness, making it difficult for the child to access support. The child's secrecy can be seen as a result of internal conflict and their struggle against the abuse. It also reinforces the compliant self, creating confusion and dissociation, ultimately making the child more vulnerable. The authors argue that the experience of being forced to keep secret may be traumatic and that rejection by the potential protector will increase helplessness. This implies that trauma in child sexual abuse can be cumulative rather than a sudden shock. Most child victims come from dysfunctional families where the sense of helplessness is acute and passed down between generations. Therefore, to understand the psychological impact of sexual abuse inflicted upon a child, one must not only look at the traumatic event, symptoms of posttraumatic stress disorder, and behavior. We must focus on the child's subjective experience, including the impact of the sexual trauma on personality development and the internal conflicts caused by environmental factors such as family dynamics.

Key words: Child Sexual Abuse, Trauma, Psychoanalytic Theory, Secrecy, Helplessness